

c 「新製品を今、開発する必要はあるか」「新製品はこれまでの製品の改良品にするか」「新製品は他社製品を凌ぐものができるか」「新製品開発はわが社独自に行うか」「新製品の開発はこれまでと同じ部署でよいのか」など。

2 どんなテーマでも、「型」を守って書く

■「型」の重要性

欧米系の人の話すのを聞いて、その知性に驚いたことはないだろうか。彼らは、実に論理的に話をする。何かを尋ねられると、たとえば、「それについて、私はイエスである。その根拠は三つある。まず、社会的な面から考えると……」「私はノーだ。多く人はイエスという。が、それは三つの理由で間違いだ」というように話を進める。我々日本人としては、その頭の良さに舌を巻くばかりだ。

では、ほんとうに欧米人は日本人と比べて「頭が良い」のか。頭の回転が速く、鋭く、深いことを考えているのだろうか。

もちろん、そのような面もあるだろう。とりわけ、日本で接することのできるような欧米人、とりわけテレビで発言するような欧米人は知的階級であることが多い。だから、子どものころ

からそのような知的訓練を受けてきた人なのだ。論理的思考に慣れている。知識も豊富だ。

が、もちろん、それだけではない。彼らの口調を聞いていて、気づくことがある。どうやら、彼らは、「それについて、私はイエスである。その根拠は三つある。まず、社会的な面から考えると……」と口にするときには、まだ内容については考えていないらしいのだ。なんとなく、「イエスで答えよう」と思っているだけで、「根拠は三つある」と言いながら、実は、三つの根拠を頭に思い浮かべているわけではないようだ。その証拠に、根拠として示されるのが、「三つ」と言っていたはずなのに、実際に口にしたものは二つだったり、四つだったりということしばしばある。

つまり、「それについて、私はイエスである。その根拠は三つある。まず、社会的な面から考えると……」というのは一つの「パターン」であって、とりあえずその「パターン」を口にして、その後で考えているということなのだ。彼らの「頭の良さ」の秘密はここにある。つまり、「パターン」をうまく使って論理的思考をしているわけだ。

ここは一つ、欧米人の方法を、真似たらどうだろう。要するに、論理的に思考するための最大のコツ、それは「型」を決めて、そのとおりに書いていくことなのだ。

ただし、「型」というのは、単なる形式ではない。これは、論理的に考えるための道筋なのだ。論理的に問題を取り上げて、それについて判断を下すには、それなりの手順が必要となる。

そうした考えの道筋、考えの手順が「型」だ。

多くの人が、「論理的に書け」と言われてきたはずだ。が、「論理的に書け」と言うばかりでは、具体的にどうすればいいのかわからなかった人も多いに違いない。が、論理的に書くのはそれほど難しいことではない。次に示す型どおりに書けば、まずは誰が書いても、とりあえずは論理的になる。途中で論がずれたり、別の問題になったりしない。

もちろん、「型」を崩して書くこともできる。たとえば、文学部の入学試験や出版社の入社試験などでは型どおりの文章より自由作文風・エッセイ風の文章を好む。そんなところでは、多少アレンジしたほうが個性をアピールできて好まれる。だが、たとえそうであっても、まずは型どおりに書く練習をするほうが早道だ。型どおりに書くのを嫌う人は、コンスタントに力を発揮できない。見事な小論文を書いたかと思えば、「支離滅裂」な文章を書く。出来・不出来の差が激しい。

それに対して、型どおりに書く人は、初めはうまくいかなくても徐々に上達する。論理がしっかりしているので、失敗しても、それなりものができあがる。そして、いったん、論理力に自信がつくと思いついて個性的なことが書ける。個性的なことを書いても、論理はしっかりした文章になる。

したがって、まずは型どおりに書けるようにしておくのが、コンスタントに力を発揮するコツだ。少なくとも、小論文やレポートに自信のない人は、「型」のマスターに全力を注いで論理的に書けるようにしてこそ、上達する。逆に言えば、「型」さえ理解していれば、内容はともかく、まずは論理的な文章にはなる。

■「型」は四部構成で

制限字数が一〇〇〇字以下であれば、基本的には、それぞれの部分が一つの段落でいい。つまり、小論文やレポートは、基本的にはⅠ～Ⅳの四段落からなると思っていいたい。ただし、それ以上の字数の小論文やレポートは、Ⅱ、Ⅲの部分をいくつかの段落に分ける。

「Ⅰ・問題提起」

イエス・ノーの問題提起をする。課題が、直接的にイエスカノーかになっていないときには、ここでイエスカノーかに転換する。文章が出題されて、それについての意見が求められているときには、「課題文は……と言っているが、それは正しいか」といった形にする。

「Ⅱ・意見提示」

イエスとノーのどちらの立場を取るかを示す。ここは、「確かに……、しかし」というパ

ターンで書くとききやすい。つまり、イエスの立場を取りたいときは、「確かに、ノーの面もある。こんな場合だ。しかし、自分はやはりイエスのほうが正しいと思う」というように。こうすることによって、視野の広さをアピールして、一方的な文章になるのを防ぐ。同時に、問題点をしっかりと理解していることを示し、反対意見を踏まえた上で、論を深める。しかも、こうすることで、字数稼ぎができる。目安は全体の三〇〜四〇パーセントの字数だ。レポートなど、制限字数が多いときには、ここをいくつかの段落にして、自分とは反対の立場の意見を紹介しながら、反対意見の根拠を示したのち、それに自分は反対であることを明確に語る。

〔Ⅲ・展開〕

イエス・ノーの根拠を示す。小論文やレポートの中心部であって、この展開の仕方によって、小論文やレポートの価値が決まる。問題となっている事柄の背景、原因、歴史的経過、結果、背後にある思想、実現するための対策など、表面的ではない部分をできるだけ深く掘り下げて書く。全体の三〇〜四〇パーセントの字数で。制限字数が少ないときには、できるだけ焦点を絞るべきだが、レポートなど、制限字数が多いときには、ここをいくつかの段落にして、複数の角度から判断を示す。

〔Ⅳ・結論〕

もう一度全体を整理し、イエスカノーかをはっきり述べる。余韻をもたせたり、道德的目標などをつけ加えたりする必要はない。

では、型どおりに書いた「ゆとり教育について」という題の小論文をここで挙げよう。「型」がどのように用いられているかを確認してほしい。

模範解答文

「ゆとり教育」が問題になっている。しばらく前から、日本の学校では、かつての受験競争が否定されて、学習内容を減らすなどして子供たちの負担を減らす「ゆとり重視の教育」が行われてきた。では、そのようなゆとり教育は正しいのだろうか。

確かに、ゆとり教育のおかげで、生徒たちは受験による抑圧から解放されて、自由に生きられるようになった面はある。受験競争が激しかったころ、子供たちは圧迫に苦しみ、意味のない競争に明け暮れなければならなかった。そして、そこから脱落したものは「落ちこぼれ」として、差別的な扱いを受けた。それに比べれば、勉強や競争を強い現在のゆとり教育は好ましいと言えるだろう。しかし、ゆとり教育は、大きな問題を抱えてい

るのである。

ゆとり教育の大きな問題として、大学に入っても専門科目の勉強についていけないほどの学力不足がしばしば挙げられ、技術立国としての日本の将来が危ぶまれている。そして、それ以上に問題なのは、学習内容が減ったため、若者は競争意識を失い、生活にハリをなくしていることである。かつて、若者は他人との競争の中で自分の能力やその限界を知り、自分の個性やアイデンティティを発見していた。だが、現在の若者にはそうした機会が失われている。しかも、学問を重視しないために、若者は知的なもの、難解なものへの敬意を失い、努力を怠る。そのため、若者はいつまでも自己確立ができず、刹那的にその時々を快楽を追いかける。努力した上で、自分を作り上げていくという意識を持たない。そのあげくの果てが、都市の歓楽街にたむろし、夜中まで遊び歩く若者の姿なのである。

私は、ゆとり教育が学力低下だけでなく、若者の意欲の低下をもたらし、自己確立を妨げていると考える。その意味で、ゆとり教育に反対である。

■「型」の注意点

ただし、「型」を用いる場合、いくつかの点に注意してほしい。

第一に、「Ⅱ・意見提示」で「確かに」の後に、説得力のありすぎないことを書く必要がある。説得力がありすぎると、「しかし」で切り返さなくなってしまう。「確かに、科学技術のために今、自然は破壊され、地球は人類の住めない場になりつつある。しかし、科学技術は便利だ」という論では、「確かに」の後のほうが、「しかし」の後よりも説得力がある。それでは論は成り立たない。

また、このように書き出して、書いている途中で、「しかし」の後に説得力がないことに気づいて、「確かに、科学技術のために今、自然は破壊され、地球は人類の住めない場になりつつある。しかし、科学技術は便利だ。しかし、自然の破壊は好ましくない」などと書いてしまうこともある。これでは、イエスなのかノーなのかがはっきりしなくなる。

少なくとも初めのうちは、きちんと、「確かに」の後に反対意見を書いて、「しかし」で切り返すという形を守ることを勧める。

第二に気をつけてほしいのは、「確かに」のあと、「しかし」の後、そして、「Ⅲ・展開」の内容をしっかりと対応させることだ。それがはっきりしていれば、論がずれることがなくなる。それが曖昧だと、論がずれてしまう。

たとえば、「ゆとり教育」という題が出たら、「確かに、ゆとり教育には悪い面もある。こんな場合だ……。しかし、競争重視よりも生徒にとって望ましい。なぜなら、……」、または

「確かに、ゆとり教育には良い面もある……。しかし、ゆとり教育より競争重視のほうが生徒にとって望ましい。なぜなら、……」などというパターンで考える必要がある。

ところが、なかには、「確かに、ゆとり教育には悪い面もある。たとえば……。しかし、ゆとり教育が今の日本では増えている」「確かに、ゆとり教育には悪い面もある。たとえば……。しかし、最近の子どもたちはゆとりをなくしている。もっとゆとりをもった精神が必要だ」などとする人が多い。おわかりだろうか。いずれも、「しかし」の後で、論が大きくずれてしまっているのだ。このようなことのないようにしなければならぬ。

もう一つ注意してほしいのは、「Ⅱ・意見提示」ですべてを書いてしまわないことだ。ここで書きすぎると、そこで終わってしまう。論のクライマックスは次の「Ⅲ・展開」なのだから、ここでは、Ⅲの内容を予告する程度にしておいて、本格的には次のⅢで書くように工夫するといい。要するに、ⅡはあくまでもⅢへの橋渡しと考えるべきだ。

ところで、この「型」をうまく使いこなすには、この四部構成をしっかりと頭に入れておいて、日常生活でも、このような論理の型を使うことだ。

たとえば、家族に「今度の休みに温泉に行こう」と言われたら、「確かに温泉に行くのもんびりできていいだろう。しかし、それではのんびりしすぎて、少し物足りない。せっかくの長い休みなのだから、どこかに行って町の見物しよう」などと考えるわけだ。そして、

「確かに……しかし……。なぜなら……」というのを口癖にしておくとい。もちろん、そうすると、人から「理屈っぽい奴だ」と煙たがられる恐れがあるが。

練習問題 2

自分の意見を型どおりに、つまり論理的に構成する練習をする。頭の体操として、次の問題に挑戦してみてください。

a 話している相手が、「日本人は英語を六年間勉強しても、会話ができるようにならない。もっと会話中心の英語教育にするべきだ」と語った。これに対して、型どおりに賛成と反対の意見を示しなさい。

b 知人が「ロン毛・茶髪はサラリーマンにふさわしくない」と言った。これに対して、型どおりに賛成（「ふさわしくない」）と反対（「そうとも言えない」）の意見を示しなさい。

解答例

次のように構成するとよい。なお、「Ⅲ・展開」について、いくつかの案を示しておく。

a

賛成する場合

〔Ⅰ・問題提起〕

会話中心の英語教育にすべきか。

〔Ⅱ・意見提示〕

確かに、会話を勉強するだけでは、深く言語を理解することはできない。だが、会話ができないのでは、外国語を学ぶ意味がない。

〔Ⅲ・展開〕

▼生きた言語を学んで意見交換するのが言語を学ぶ意味だ。会話によってこそ、深く交流できる。今、人々が使っている言語で生身の人間と交流してこそ、意味がある。

or 文法中心の訳読教育は、日本が一方的に外国から文化を取り入れていた時代の学習方法だ。今では時代が違う。対等の立場で交流するには会話が必要だ。

〔Ⅳ・結論〕

したがって、会話中心の英語教育が望ましい。

反対する場合

〔Ⅰ・問題提起〕

会話中心の英語教育にすべきか。

〔Ⅱ・意見提示〕

確かに、会話も大事だ。しかし、会話偏重にすべきではない。

〔Ⅲ・展開〕

▼外国語教育の本質は表面的な会話ができるようにすることが目的ではなく、外国語を知ることによって、外国の文化を深く知ることである。

or その国の言語のもっとも洗練された結晶である文学作品などを原語で味わってこそ、言語という民族の文化のエッセンスを味わい、理解することができる。

or 英語の文法を知ることによって、日本語の文法の特徴、日本文化の特質を理解できる。

〔Ⅳ・結論〕

したがって、正確な文法を知って、文章を読解することのほうを重視すべきだ。

「ロン毛・茶髪はふさわしくない」という立場で書く場合

〔Ⅰ・問題提起〕

ロン毛・茶髪はサラリーマンにふさわしくないか。

〔Ⅱ・意見提示〕

確かに、個人の自由がある。また、個性をアピールできる職種では、ロン毛・茶髪も悪くない。が、日本の社会では、これは好ましくない。

〔Ⅲ・展開〕

▼ロン毛・茶髪は、自己主張の印であり、組織に入りたくないという意思表示でもあるはずだ。だが、サラリーマンだということは、組織の一員ということだ。サラリーマンである以上、スーツを着るべきだし、ロン毛・茶髪は好ましくない。

or茶髪は髪の毛の黒い自分を否定することであって、自己否定にほかならない。日本人らしさを否定して外国人の真似をするのは、自信のなさを埋めようとする事だ。もっと自分に自信をつける方向で考えるべきだ。

〔Ⅳ・結論〕

したがって、ロン毛・茶髪はサラリーマンにふさわしくない。

「ロン毛・茶髪でかまわない」という立場で書く場合

〔Ⅰ・問題提起〕

ロン毛・茶髪はサラリーマンにふさわしくないか。

〔Ⅱ・意見提示〕

確かに、組織の一員であるサラリーマンである以上、サラリーマンらしい服装は必要だ。しかし、ロン毛・茶髪がそれを乱すとは言えない。

〔Ⅲ・展開〕

▼これからはサラリーマンであっても、自分の個性を主張し、獨創性を發揮して仕事をするべきだ。上司に従属し、言われたままのことだけをやるサラリーマンでは、これからの時代は成り立たない。従属を否定するロン毛・茶髪は悪くない。

or企業ももっとおしゃれであるべきだ。日本の企業が低迷している一つの原因は、生真面目で拘り定規にものを考え、柔軟な感覚を持たないことだ。ロン毛・茶髪を認め、自由な服装を認めるような発想が必要だ。

〔Ⅳ・結論〕

したがって、ロン毛・茶髪も悪くない。